

# 簡易初期調查結果

## 【目的】

簡易初期調査の目的は、JR武豊線沿線地域（中心市街地（半田駅前エリア、半田運河エリア）、亀崎エリア）のポテンシャルを評価し、古民家や歴史的資源を活用したまちづくりの事業可能性を探ること。

## 【想定開発プロセス】

※状況により変更の可能性有



# ◎エリアのポテンシャル調査結果

## 調査結果

- ✓ 酒や酢などの醸造、和牛など**複数の食コンテンツ**が観光資源として活用できるうえ、伝統行事である祭りも歴史文化性が高く、**ユネスコ無形文化遺産に登録**されるなど**対外的評価も高い**。
- ✓ 観光資源の多面性、コンテンツ性があることから**周遊・滞在型観光地**としても**まちづくり開発が見込める**。
- ✓ 半田駅前エリアでは開発が進み歴史的まちなみの現存は限定的だが、**活用ポテンシャルを感じる昭和レトロの建物**は点在している。**運河エリアと亀崎エリアでは歴史や趣ある建物が面として残っており**景観を観光資源の一つとして活用することができる。
- ✓ 空港も近く、**鉄道・航空含めアクセス性に優れている**。
- ✓ 運河周辺エリア、亀崎エリアを中心に活用可能性のある**地域性を象徴する建物が複数存在**している。
- ✓ 開発検討エリアにおいては概ね宿泊施設、店舗の開発をするうえでの法的制限（用途地域、地区計画など）は見受けられないが、**運河エリアについては一部地区計画により宿泊施設としての活用に制限がある**。
- ✓ 様々な取り組みを展開する地域酒造事業者や地域観光協会など、**まちづくりに関わる活動をしている地域主体が複数存在**し、連携できる可能性がある。
- ✓ イベントや新たな取り組みにより**まちの活性化に向けた機運が醸成**されており、官民連携での体制が期待できる。

**結論：エリアのポテンシャル「○」**

# ◎半田市の地域資源

- ミツカンやユネスコ無形文化遺産に登録された亀崎潮干祭をはじめ、知名度や文化的価値の高い観光資源が複数存在するうえ、食や景観、伝統行事など多様な観光資源が揃っており、周遊型・滞在型観光地としての展開の可能性が見込める。

### ミツカン・MIM



江戸時代の酢作りや受け継がれてきた醸造の技術、食文化の歴史などを学ぶことができる体感型博物館。デジタル技術を活用した体験価値向上のため2024年にリニューアル。1804年の創業から続くミツカンは半田市で最も認知度の高い観光資源。

### 中笠酒造・國盛酒の文化館



江戸時代（1844年）創業と歴史性が深く、酒の文化館では酒造道具や昔のラベルなどの展示に触れながら半田の醸造の文化と歩みに触れることができる。建物自体も半田の特徴を表す黒壁となっており景観性としても優れている。

### 山車祭りの文化



2016年にユネスコ無形文化遺産に登録された亀崎潮干祭のほか市内には地区ごとに31輛の山車があり、300年という歴史性、規模ともに観光資源としてのポテンシャルが非常に高い。

### 半田運河



北海道の小樽運河、宮崎県の堀川運河と並ぶ日本三大運河の一つ。景観だけでなく、醸造の文化を支える流通の要所であるとともに、ここから江戸や大阪に酒や酢が送られていたという歴史性、ストーリー性を持ち合わせている。

### 半田運河関連イベント



運河酒場やCanalNightなど多様なイベントが開催されており、多様な事業者との連携や顧客層の呼び込みにつながっていると考えられる。

### 半田赤レンガ建物



1898年建造という歴史性だけでなく、横浜赤レンガ倉庫や日本橋の設計も行った明治建築の3大巨匠・妻木頼黄の設計である点や、現在でも復刻版のカプトビールが飲める点など、景観・食コンテンツの両面で観光客を惹きつける要素を持つ。

### 新美南吉記念館



「ごんぎつね」をはじめとする新美南吉の童話の世界観を体験できるとともに、使用していた机や愛用品も見ることができ、文学ファンや親子連れでの利用が多い。

### 矢勝川の彼岸花



秋には「ごんの秋祭り」が開催され300万本の彼岸花が川辺一帯に咲き乱れ圧巻の光景が見られる。

### 知多和牛ブランド



畜農産業が盛んな知多半島内においても肉牛の1戸あたり飼養頭数で全国平均の約4倍とトップクラス。肉質もさることながら、知多和牛についても発祥は中笠家にもあり、ストーリーとしても地域との連続性がある。

# ◎文化から見る主な半田市の資源

- 山車祭りや蔵のまちをはじめとする景観など、100年以上にわたり地域で受け継がれてきた多様な文化が今もまちに根付いており、歴史文化に関心のある顧客層との親和性も非常に高いと考えられる。
- 地域内外の連携による資源の磨き上げの動きも見られ、半田市単独でもツーリズムとして昇華できるポテンシャルが感じられる。

## 【まちなみや祭礼行事に見る歴史性】

- 300年以上の歴史を持つ山車祭りが現在もほとんど形を変えず残されており、祭りそのものが半田市を象徴する一つの景観と捉えられる。また、地域住民の祭りに対する意識も高いことから強力なシビックプライドが醸成されていると考えられ、地域の資源を活かした観光まちづくりを進めていきやすい地域であると思われる。
- まちなみについてもまちの特徴である醸造文化を象徴する蔵のまちなみが今も面的に残されており、こういった祭やまちなみを見る歴史の現存性は半田市のまちづくりにおけるコアコンテンツになると考えられる。

## 【醸造・発酵の食コンテンツ】

- 発酵、醸造に関する歴史ある地域資源が複数存在するが、それだけでなく「おとなり酒場」をはじめとする新たな「場」の創出や発酵ツーリズムなど、既存の地域資源の磨き上げの取り組みが見られ、地域資源を活用したまちづくりの機運の高まりが感じられる。
- 発酵ツーリズムにおいてはモニターツアーでインバウンドからも高い評価を得るなど、国内だけでなく日本の食文化や歴史に関心の高い層をはじめとするインバウンドの集客も拡大していけるポテンシャルが感じられる。国内でも醸造や日本酒をコアコンテンツにしたまちづくり事例が複数あり、ツーリズムに昇華できる素地があると考えられる。



# ◎半田市を拠点とした県内醸造ツーリズムイメージ

- 愛知県内には醸造のまちが複数あるが、半田市の強みである酢、酒のほかみりん、醤油、味噌、たまりなど多様な醸造コンテンツがあり、県内でも発酵をコンセプトにした周遊型ツーリズムを展開できる可能性が考えられる。
- 他市町においても日帰り観光がほとんどのため、中心である半田市を滞在拠点に各地を巡るという滞在スタイルも想定できる。

**【名古屋市大高】**  
萬乗酒造、神の井酒造、山盛酒造の3軒の酒蔵があり、いずれも創業100年以上の歴史がある。古くから知多半島への交通の要衝として開けており、今も酒蔵をはじめとする古いまちなみが一部残されている。

**【碧南市】**  
三河みりん発祥の地。みりんや白しょうゆで有名な醸造のまちでみりん蔵や醤油蔵が立ち並ぶ。蔵ガイドツアーなどの体験コンテンツのほか、発酵調味料を活かしたスイーツなど新たな提案も行っている。

**【武豊町】**  
味噌・たまり蔵「中定商店」は「醸造伝承館」として活用され、醸造の技術や歴史を今に伝える。味噌・たまりの香りに包まれながら蔵のまち散策を楽しむことができる。

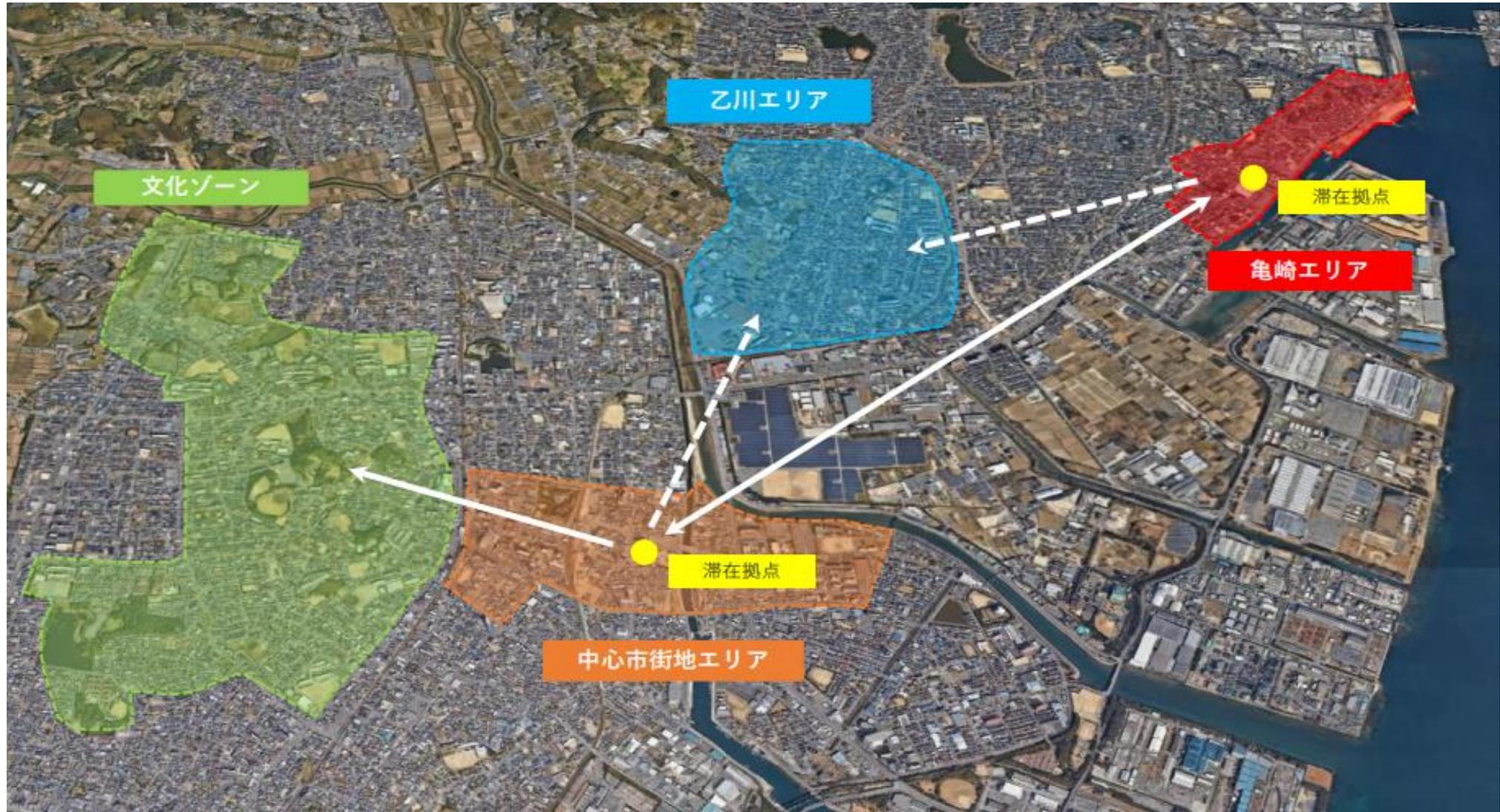
R5年度 市町村別観光入込客数・宿泊者数

	半田市	武豊町	碧南市	名古屋市
観光入込客数 (人)	1,575,017	60,887	2,393,298	57,730,281
宿泊者数 (人)	179,772	9,629	11,412	10,436,801
合計 (人)	1,754,789	70,516	2,404,710	68,167,082
宿泊率	11.4%	15.8%	0.5%	18.1%

出典：知多半島観光圏観光入込客数調査、名古屋市観光客・宿泊客動向調査（2023年）、令和6年度碧南市まち・ひと・しごと創生総合戦略推進会議

# ◎半田市内ゾーニング

- 乙川エリアと半田駅西側の文化ゾーンは新美南吉記念館などの文化施設や寺社仏閣が点在するが、面としてのまちなみや観光ポテンシャルの観点から分散型開発の方向性としては中心市街地エリアや亀崎エリアをメインの滞在拠点と位置づけ。
- 中心市街地や亀崎エリアでの滞在を中心に、 $+ \alpha$ の立ち寄りスポットとして文化ゾーンなどにある地域資源への周遊を想定。



# ◎中心市街地（半田駅前・運河）エリアのまちなみの状況

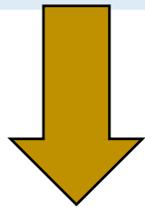
## まちなみの状況

### 【半田駅前エリア】

- 駅前エリアは、明治以前の古い町並みは薄れてきつつあるものの、昭和レトロを感じる趣ある建物が複数存在し、店舗や飲食店、コワーキングスペースなどの交流拠点としての活用ポテンシャルが感じられる。

### 【半田運河エリア】

- 運河周辺は蔵のまちなみが最も強く表れており、平和通り北側の観光拠点が集積するエリアは歩道も整備されていることからまちを歩きながら地域に触れる分散型ホテルの滞在スタイルにも合った町割りになっている。
- 新栄町にも古い建物や昭和レトロを感じる趣ある建物が複数あり、周遊圏に含んだ活用が想定できる。



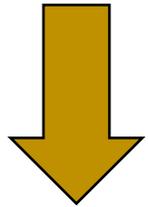
## 面的展開のイメージ

- 例えば、駅周辺は昭和レトロな建物の景観を活かしながら新たな機能や感性の高いテナントによる集客を目指し、半田運河周辺では景観と歩きやすさを活かし、半田の文化を体験しながら歩きたくなるエリア作りを目指す。
- 例えば、紺屋海道に誘客効果の高い店舗を配置することで半田赤レンガ建物から運河までの動線をつなぎ、まち全体での周遊性向上を狙う。

# ◎亀崎エリアのまちなみの状況

## まちなみの状況

- 古民家を活かした新たな観光拠点ができおり、神前神社から尾張三社周辺にかけては町の歴史を感じる趣ある建物が連なっているほか、亀崎潮干祭では地域の祭文化そのものが一つの景観となっており、景観自体が訪れる目的になりうるポテンシャルが感じられる。
- 歴史資源を活用した分散型ホテルなどとの親和性も高いと考えれる。



## 面的展開のイメージ

- 例えば、飲食や店舗の他、亀崎の歴史文化を体感できる体験イベントを拡充させることで没入型の滞在体験を創出する。
- 例えば、日本酒については蔵人体験や月の名所と言われた観月亭での月見酒、発酵料理味比べ体験。祭についてはゴマ掘りなどの潮干祭関連行事のツアーや看袷造り体験など、祭の前後の行事も体験できることで地域のファン・リピーター化を目指す。

# ◎半田市での周遊滞在イメージ

- 半田駅前～運河エリアと亀崎エリアでそれぞれ新たな店舗や飲食店のほか、醸造や歴史文化に触れる体験コンテンツを拡充することで、それぞれのエリアで1～1.5日ずつ過ごす1泊2日から2泊3日の滞在型まちづくりにむけたエリア開発を推進する。



滞在の拠点となる半田・亀崎エリアの核となる物件を中心に活用方向性を検討

# ◎検討の方向性

## 地域の特徴・強み

### ●発酵・食文化

- ・江戸時代から続く酒や酢といった発酵の食文化とツーリズムとしての活用

### ●地域プレイヤーの存在と連携体制

- ・まちづくりに取り組む地域プレイヤーが既に存在し、官民連携での体制も整っている。
- ・イベントや新たな取り組みなど、まちづくりの機運が醸成されつつある。

### ●伝統行事や蔵の町の現存性

- ・歴史ある祭や地域の文化を表すまちなみが残されており、目的地となりうる独自性がある。

## 地域課題

### ●半田駅前の景観性

- ・駅前エリアにおいては歴史ある建物の除却が進み、趣ある景観が限定的である。

### ●日帰り中心の観光

- ・中心市街地からアクセスも良いため立ち寄りでの消費型観光が中心になっている。

### ●ビジネスホテルのみで滞在の選択肢薄

- ・市内のホテルはビジネスホテルが大半で高付加価値型の宿泊施設がないため、宿泊を検討する際の選択肢が限られている。

## 地域・市場環境

### ●観光市場とコロナ後

- ・観光市場はコロナ禍より回復し今後さらなる市場の拡大が予測される一方、主要都市圏・観光地以外の地域では差別化や、地域資源の磨き上げによる目的地（デスティネーション）化を進めて行くことが課題となっている。

## 【検討の方向性】

半田市の歴史文化・地域資源を最大限活かし、半田駅前～運河エリアと亀崎エリアを回遊性の高い面的な観光によるまちづくりの起点とし、関係人口の創出や移住・定住の促進に繋がる観光滞在型のまちづくりを目指す。

# ◎まちづくり方向性（案）

- 地域資源の磨き上げを行うことで地域に新しい価値や“場”が生まれるまちづくりを目指す。

## 文化・伝統の継承と新たな活用

醸造で栄えた半田市の趣あるまちなみ。歴史の息づく古民家などの地域資源を活かしながら、新しい機能や用途を加えることで新たな活用方法を見出し、次世代へ暮らし文化を継承する。



伝統的な建物の活用



新しい機能性や付加価値

×

## 発酵イノベーション・世界への発信

半田市の最大の特徴である発酵文化を最大限に磨き上げることで発酵のまち＝半田というイメージを確立し、インバウンドを中心とした新しい来訪者層の取り込みを行う



発酵文化の昇華



「発酵＝半田」の国内外への発信

×

## 産学連携による技術の継承と新たな取り組みの生まれる場

サテライトキャンパスや学生によるマルシェ出店などのチャレンジと、建築や都市工学を学ぶことによる地域の技術継承。それにより若い世代による取り組みが広がっていくことを目指す。



サテライトキャンパスでの活動



地域での実践、チャレンジ

×

## 新たな交流の生まれるまち

半田市を知多半島、中部圏の観光の滞在拠点にする中長期滞在インバウンド層や、国内の2拠点居住や移住者など、新たな関係人口のかたちを生み出すことで新しい交流の生まれるまちを目指す。



インバウンドの中長期滞在



2拠点居住や移住

# ◎まちづくり機能例

- 新たな機能、体験と地域と来訪者のタッチポイントを増やすことで、新たな来訪者層と多様な関わり方を生み出す。



醸造の歴史に思いを馳せる  
地域を感じる古民家宿泊



多様な交流を生む  
コワーキングスペース



来訪者と地域の交流拠点となる  
カフェ兼ゲストハウス



寿司×日本酒の  
新たな食拠点



空き家を活用した  
移住・2拠点居住



まちを歩くことが楽しくなる  
個性的な飲食店



新たな取り組みや事業者を支援する  
チャレンジショップ



目的地となりうる  
感性の高い雑貨や物販テナント



建築や都市工学を地域で学び  
実践する産学連携



地域の食材を活用した  
地産地消レストラン



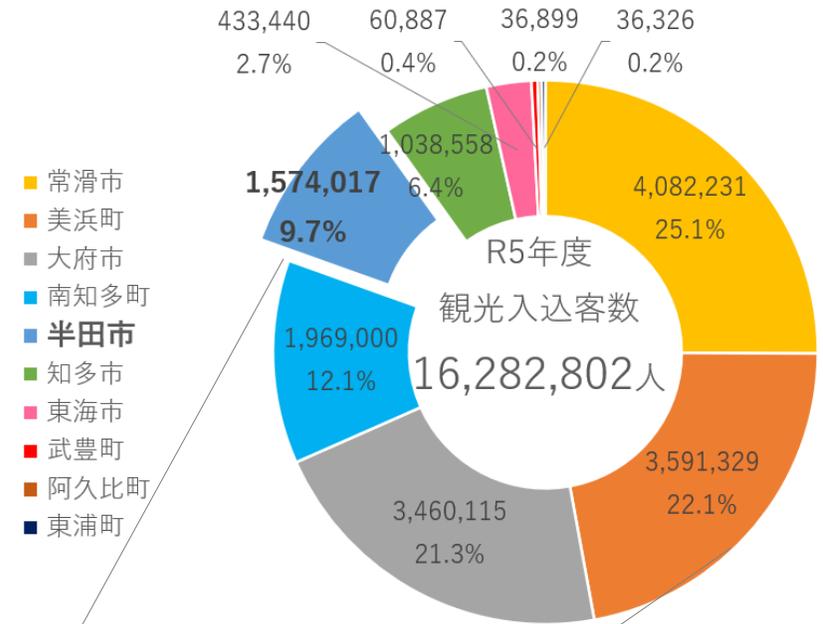
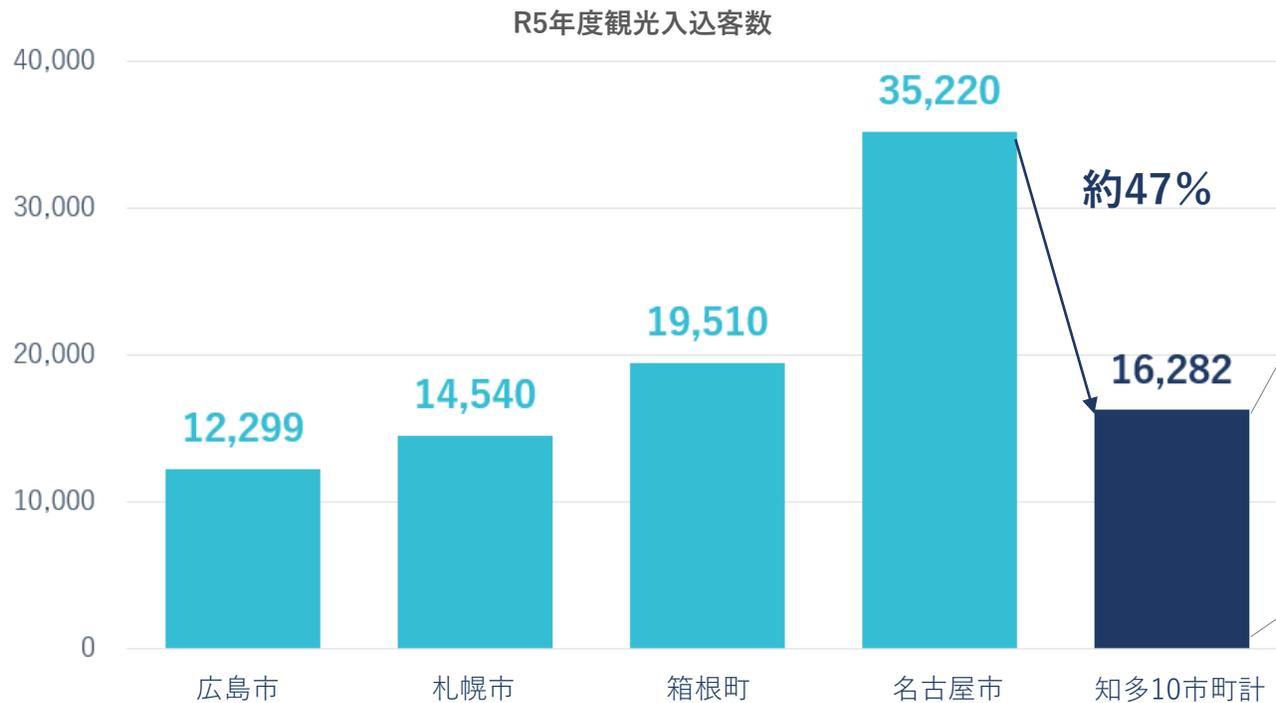
周遊性を高める2次交通や  
新型モビリティ



蔵の町ガイドによる  
地域と観光客との交流創出

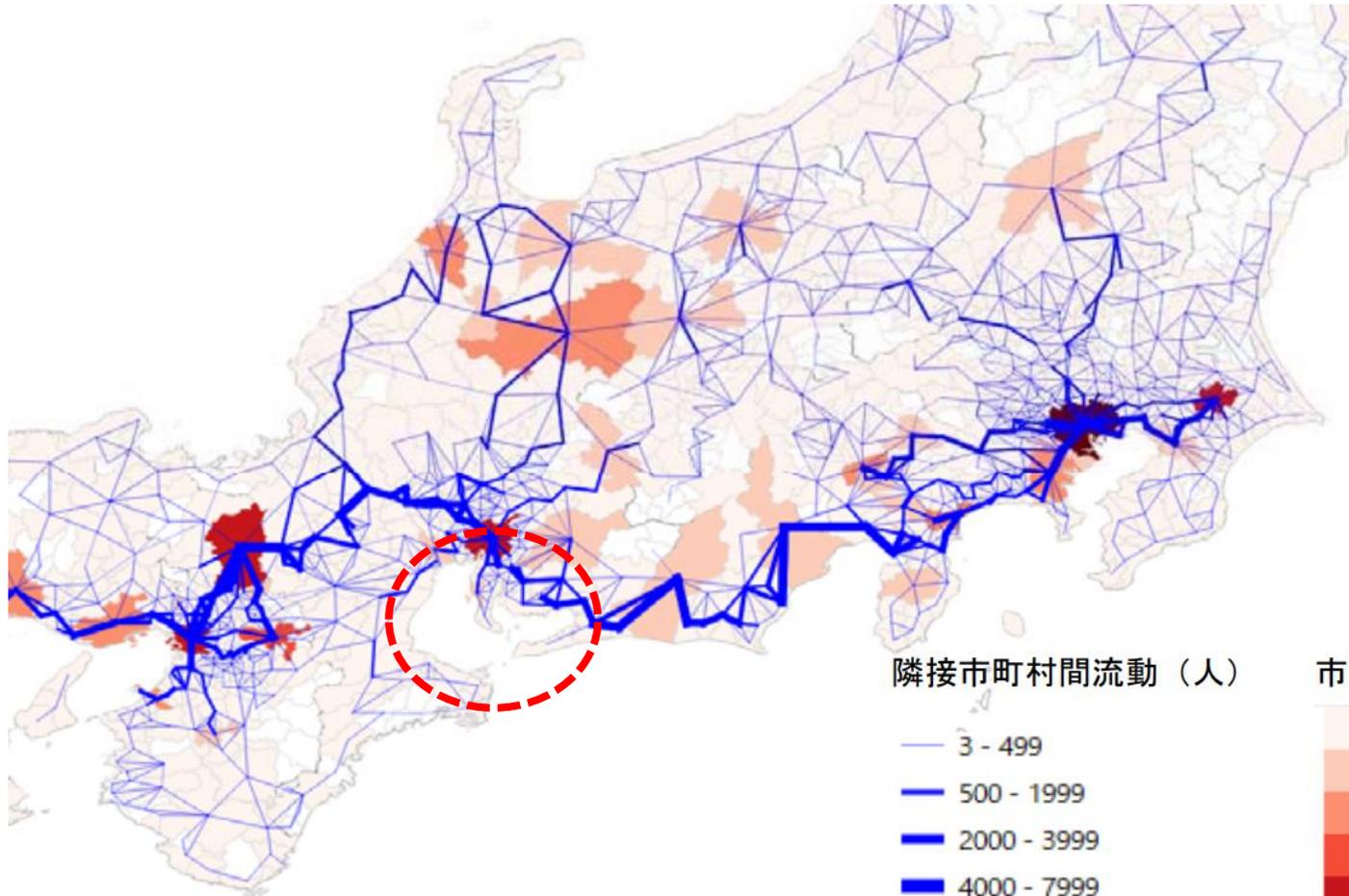
# ◎知多半島の潜在観光ポテンシャル（国内）

- 知多半島10市町の合計で見ると年間約1600万人の観光客が訪れており、名古屋市約半数に匹敵するほか、広島や札幌といった有名地方観光都市と同程度の集客ポテンシャルを持ち合わせている。
- 地域資源を磨き上げ、訴求を行うことでこれらの知多半島を訪れている観光客を半田市にも誘客できる可能性がある。

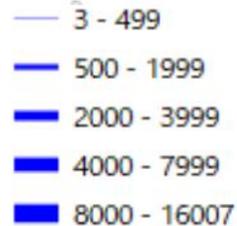


# ◎知多半島の潜在観光ポテンシャル（インバウンド）

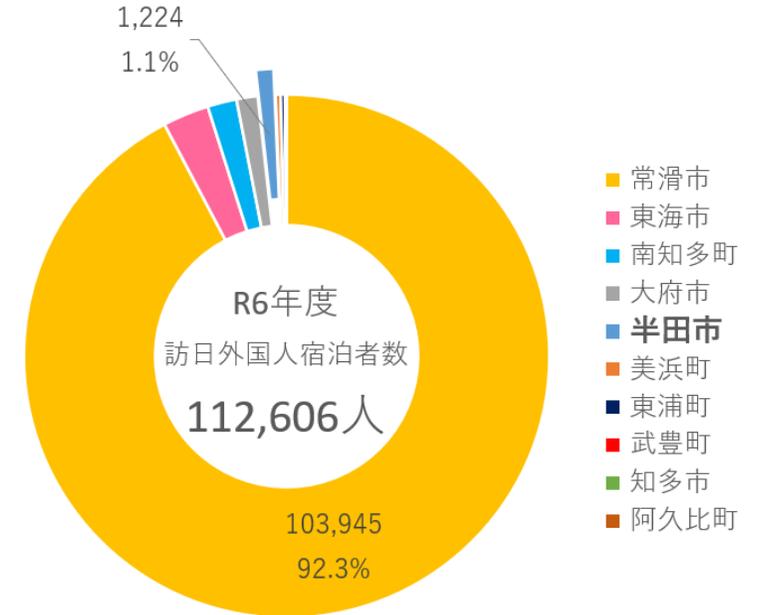
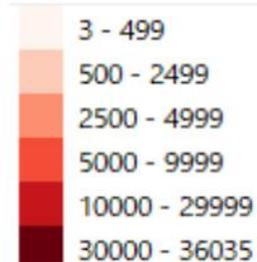
- 訪日外国人の流動ルートとして名古屋～常滑市間では移動が見られるがそれ以外では流動数自体も少なく、常滑市についても中部国際空港の利用が大半と推測される。中部国際空港の令和6年の訪日外国人利用者数が320万人だったことを鑑みると、名古屋や中部国際空港を利用してる訪日外国人の取り込みには大きな伸びしろがあると言える。



隣接市町村間流動（人）



市町村別滞在者数（人）



出典：ビッグデータ分析による名古屋市内における訪日外国人の行動実態

# ◎半田市推進体制イメージ

